

令和7年12月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

庚申信仰

「庚申」と書かれた石碑を目にすることがあるかと思います。これは庚申塚や庚申塔と呼ばれ、庚申信仰に由来するものです。庚申は干支で「かのえさる」の日を指しますが、その日に行われる行事を庚申待^{こうしんまち}、組織を庚申講^{こうしんこう}といいます。中国の『抱朴子^{ほうぼくし}』に、「人間の体内に三尸^{さんし}（三匹の虫）がいて庚申の日の睡眠中に寿命をつかさどる天帝にこの世での悪行を報告する」とあり、このためこの日は夜眠らないとする守庚申^{しゅこうしん}の風習が広まりました。この信仰が8世紀頃に日本に伝わり、神道・仏教と結びついて多様に発展してきたのが庚申信仰です。

日本では15世紀に『庚申縁起』が作られ、仏教的行事として公家や武士の間に広まりました。この頃から庚申待ちの石塔や板碑が造立され始めます。ちなみに現存する最古の庚申塔は埼玉県川口市の『文明三年銘庚申待供養板碑』（非公開）で1471年に作られたものと伝わっています。

庚申の図像として神道では猿田彦神が、仏教では青面金剛^{しょうめんこんごう}がよく用いられます。猿田彦神はサル^{サル}の音が申と同一であること、青面金剛は伝染病を防ぐとされるため三尸を駆除する役割を担うことがそれぞれ結びついた由来のようです。また、虫の移動を防ぐという意味から、街道沿いや村落の境界の塞^{さい}の神^{かみ}として、道祖神と同様に共同体の安全を保つ結界の役割も担っていたようです。

民間において庚申講は、江戸時代に広まりました。念仏講と習合したり、農神として崇められたりしました。また庚申待の目的である「眠らずに過ごす」ことが徹夜の寄り合いや宴会の大義名分になり、娯楽性が強くなることで民衆に広まっていきました。庚申塔の多くはこの頃作られたもので、庚申講を3年18回続けた記念に造立されたものが多いようです。

裏面の写真は天寧寺の総門手前にある庚申塚ですが、変わった字体を用いています。石碑の裏面には慶應2（1866）年11月最勝日と書かれています。

江戸の世にはすっかり民衆の間に定着した庚申信仰ですが、明治政府は迷信を理由に公道沿いにある庚申塔の撤去を進めます。その後も震災・戦災、戦後の道路拡張などによって都市部の庚申塔の多くは撤去や移転されることになりましたが、神社仏閣の境内、古道や旧来の街並みが残っている集落においては現在も見ることができます。

（文責 沖 祐昭）

